

清田中全中参戦記～終わりは始まり～

札幌市立清田中学校 高橋和也

広報委員会より、早々の原稿依頼を頂きました。…が、全中から帰ってきてから大小様々な出来事があり、それらを整理しながら、原稿を書いたら消し、書いては消しの繰り返しで、結果として大変遅くなったことをお詫びいたします。

今回の全中参戦は私にとって4度目。ただし、厚北での3度は全て男子でしたので、女子としては初めてとなります。広報委員会からは「チーム作りの根幹部分」「予選(全市・全道)を振り返っての過程」「出場権獲得後の対策」「終わった後の感想」について書いてほしいとお願いされました。入稿が遅れた分、極力その期待に応えられる文章を書いていきます。

1. チーム作りにあたって～清田中学校での指導を始めるまで

小説やテレビ、映画なら、1つの物語が終わればそこでエンドロールが流れて完結なのでしょうが、現実の世の中には続きがあります。「終わりは始まり」であるということを感じています。

今回の全中出場もいったいどこからが始まりなのかと考えれば、すべては2010年3月10日にあったと私は考えています。この日は札幌市教職員の異動内示が出る日でした。今でもその日のことを、昨日のことにように思い出します。当日の厚別北中は校内球技大会の日。休憩時間に職員室に立ち寄った際、「高橋先生、ちょっと…」と呼び出され、「清田中学校に異動です。」とまさかの言葉を校長室で聞きました。

転勤は公務員の宿命。ましてや、私は12年間も厚別北中に在籍していましたから、いつ出てもおかしくない状況でした。しかし、当時の厚北は小柳大(現・札幌日大高校)を筆頭に、小柄でも機動力を生かしたバスケットボールで、南大会・決戦大会を勝ち抜きました。後から聞いて知ったことですが、子ども達は、優勝することが私を厚北に留めることであると信じ、必死に戦って勝ち取った優勝杯・優勝旗を校長室に持参し、校長先生に「高橋先生を転勤させないでください！」と直訴していたそうです。

しかし、子ども達の願いは聞き入れられることもなく、私は清田中学校に転勤することになりました。幸い、八条中学校より松井智弘先生が後任として来ることがわかり、安心して厚北を去ることができました。それでも、高い志をもって、共に奮闘した子ども達との別れはこの上なくつらく、内示が出てからの練習は苦しくて苦しくて体育館のドアや廊下の影に隠れ、ばれないように涙をぬぐう日々でした。

これでもう厚北での指導は終わり…と思いました。しかし、保護者の方々のご尽力もあり、厚北・清田の両校長先生の温かいご配慮の下、私は中体連が終わるまで、土日は厚北の指導にあたって良いという許可を得られました。ベンチで指揮を執ることは許されるわ

けもなく、決して外部コーチとは言えない中途半端な立場でしたが、ともに頑張ってきた子ども達、そしてお世話になった保護者の方々に少しでもお役に立てたら…と思い、この話を引き受けました。

そんな状況にありましたので、清田中に着任したとは言ってもバスケット部の指導には距離を置こうと最初は考えていたのです。ところが、入学式翌日から、私が担任する1年1組の前を上級生がズラッと取り囲み「〇〇、出てこいや！」などと生徒名を叫ぶ光景…。落ち着いた穏やかな厚北の校風にすっかり染まっていた私の心身は、一気に生徒指導全開モードに切り替えられました。ふと見ると、男子バスケット部の子どもその集団の中にいるではありませんか。よし、これはバスケットを突破口に学校を変えていくしかないと予定を急遽変更。「おお、お前バスケット部だろ！」などとその子に話しかけつつ、集団の輪を崩し、「じゃあ、これから体育館に行くぞ！」と言って、突然その日から練習を始めることになりました。

それから、平日は清田中学校で勤務し、部活動指導も行う。土日になると、厚北で練習。二足のわらじを履いた生活となりました。昨年の清田中学校は、窓ガラスが割られ、非常ベルが鳴り、消化器がまかれる…という状況。油断をすると、すぐに1年生の生活階に乗り込んできていちゃもんをつけてくる上級生と対峙する日々です。転勤先が清田中に決まったことで「これでまたバスケットを存分に指導できるね！」という言葉をたくさん頂きましたが、バスケットより生徒指導で奔走する毎日でした。

また、外部コーチの大変さは、旭川西高をインターハイに導いた日下部先生から事前に伺っていました。十分に覚悟はしていましたが、やはり、もどかしさやまどろこっさをぬぐい去ることはできないことがわかりました。ただ、そんな中でも勉強になったことがあります。中体連の規定で正規の外部コーチになれなかった私の居場所は、保護者席だったわけです。しかし、ここから見ること、保護者の方々の思いにかなり触れることができました。試合が始まれば、コーチのように直接子ども達と関わることはできず、ただただ子ども達の活躍を祈って応援するのみの保護者の思い。コーチとしてだけ過ごしていたら、きっと実感することはなかったでしょう。

そして、2010年8月9日。釧路湿原の風アリーナで行われた中体連全道大会3回戦で、厚北は江別二中に敗れます。前半のリードを守りきれず、あれよあれよという間に相手のペースに飲み込まれていく子ども達。私はどうすることもできず、手塩に掛けた子ども達の最後の試合を、観客席で見届けました。この日を以て私の厚北での指導は終わりました。最後のお別れの時に彼らにはこう言いました。「自分がいなくても勝ち抜けるだけの力をつけさせられなくてゴメン。でも、ここからが大事。試合には負けても、人としての生き方では負けないように頑張ってもらいたい。先生も清田で厚北に負けない良いチームを必ず作って全中に行くから。」

終わりは始まり。全道大会の開催地・釧路から帰ってきた翌日から、清田での本格的な指導を始めました。今まで清田にしながら中途半端な指導だった非礼を詫び、子ども達と

これからの「目標」について話し合い、お互いに本気でバスケットに打ち込もうと確認。夏休みの残りの日程を調整し、清田中バスケット部正顧問として新たな一歩を踏み出しました。ただし、当初は男子だけでしたが…。

諸事情から女子バスケット部の指導もすることになったのは、夏休みの終わる直前。つまり、今年全中に出場した3年生の指導は実質1年にも満たなかったのです。

2. チーム作りにあたって～女子と本格的にバスケットに向き合う中で

厚北にいた当時、隣のコートで女子の練習を横目にしていました。山岸先生、増井先生、北浦先生、そして現在の金子先生の指導。まさか自分が女子を教えることになるとは夢にも思わず、亡くなられた北浦先生からは青葉中で女子を指導されていた頃の大変貴重なお話、金子先生には独特な女子指導「金子理論」を随分話してもらいました。テスト期間で部活動停止期間には北星女子の白川部先生にお願いして、北星の取り組む「走る練習」を見学させてもらったこともあります。

それらの話を下地にして、男子と女子の指導に共通項を感じながらも、いざ実際に同時に教えるとなるとどうなるのか。一抹の不安はありました。過去に私は男女同時顧問となって指導にあたったことが2度あります。しかし、その際は男子と女子の心技体に差があまりにもあったため、結局男女別に分けて練習するしかありませんでした。

幸い、清田中の場合はバスケットボールに取り組む心技体の男女差がほとんどありません。下手をすると、キツイ練習や難解な練習をやる際、女子の方が男子をモチベーションで上回ることも多々ありました。そのため、特に「女子だから…」と配慮して練習を組み立てる必要はなく、男女全く同じメニューで同時に行うことができました。これはやはり女子が強い清田という土地柄、伝統がもたらすものでしょう。

ただ、全中に出場した今年の3年生も、2年生の秋頃までは圧倒的に体力不足でした。それまで廊下トレーニングやフットワークに真剣に取り組んでいなかったツケが出ていたのです。9月までの練習試合では走り負けしたり、当たり負けしてケガをすることがよくありました。バスケットの技術以上に「体力で負ける」ことは悲しいこと。清田中女子のチーム作りにおいて、着手した第一弾は「ケガをせず、試合の最後まで走りきれ強い身体作り」でした。

元々、厚北にいた当時から、私は身体作りに力を入れています。体育館練習でも1時間程度は必ずフットワークや補強トレーニングを行います。清田でも「なぜ身体作りが必要なのか」その意義を子ども達に常に話し、同様な取り組みを開始しました。ただし、トレーニングで怖いのは「やり過ぎ」や「間違ったやり方」によるケガです。当然、私もありとあらゆる本を読んでトレーニング法を研究していますが、専門家にかなうレベルではありません。「餅は餅屋に」ではありませんが、専門的な知識と技術を身に付けた人からの指導は心強いものです。これもまた幸いにして、厚北時代からお世話になっている田中孝和トレーナーに、清田中でもご指導を頂けることになりましたので、正しいトレーニング法

で子ども達は着実に力を蓄えていくことができました。あの暑かった夏の全道でも、最後まで走りきることができたのは、やはり日々のトレーニングの成果だと考えます。

体力不足を露呈する一方、「清田女子のお家芸」であるシュート力はコーチである私自身が目を見張るほど最初から素晴らしいものがありました。技術的には文句なしのレベルです。ただし、長所は短所にもなりやすいもの。シュート力に溺れて、状況を考えずポーンと軽く打ってしまったり、「頑張ってるって、速攻で走ってレイアップで2点」というバスケットにはあまり興味を示さない一面もありました。悪い見方をすると「シュートさえ決まればいいんでしょ」という感じさえする試合運びです。徐々に体力がついてきたことを土台にして、「しっかりとした考えに基づいたバスケット技術の運用」をチーム作りの2番目に着手しました。

時を同じくして、山の手高校が三冠を達成。11月頃から月1回のペースで練習におじやまさせて頂いたのは選手はもちろん、コーチである私自身にも大きな勉強となりました。上島さんが「勝つためにはディフェンス」「チャンピオンになるためにはリバウンドとルーズボール」と何度も言ってくれたおかげで、子ども達の意識の中にも地味な所、目立たない所を頑張る意識が芽生えました。ただ楽しいだけでなく、歯を食いしばって頑張った後に見えるもの。苦心して登った山頂から見える景色のすばらしさがわかればしめたものと私は考えます。私が課す無理難題にも、子ども達はそれが全国で勝つためのものであるならと飛びついてくるようになりました。

ただ、清田で女子の指導を開始して以来、実は一番気になっていたのは、彼女たちが本当にバスケットが好きなのか…ということでした。本格的に練習に取り組み始めた当初は故障がちだった彼女たち。テーピングをしながら、雑談の中で「どこの高校に行きたいと思ってる？」と聞いても、「高校に行ったらもうバスケットはしません。」と答える子さえいました。とある問題行動が部内で起こったときも「責任をとってバスケットを辞める」ことが大前提になっていたほどです(本当にバスケットが好きなら、辞めることを真っ先には考えないものです)。

好きで始めたバスケットだったにも関わらず、小学校から中学にあがる段階で半分以上の仲間がやめてしまい、残った自分たちも何を目指していいのかがわからない状態。口では「全国に行きたい」とは言いながらも、自分たちに自信がもてないようでした。だから、当初は選手間で本当によくもめました。練習をつぶして何度ミーティングをしたことか。目標と目的と夢が揺らいでいる間は、些細なことですぐにもめるものです(特に女子は)。ただ、それを曖昧にせず(時にはかなり激しい抗議を親御さんから頂くこともありましたが)、丁寧に向き合っていくうちに、チームとしての地力がつき、その上に結果が伴うことで、彼女たちの目標と目的と夢が定まっていったと思われれます。

そう考えると、やはりチーム作りの最大の命題は「選手の心を作る」ことにあります。月並みな言葉ですが「バスケットボールを通した人間形成」ができれば、同じ中学生同士の試合ですからそう簡単には崩れない。そう思います。

もちろん、女性の気持ちは女性にしかわからないところがあります。それを仁部さおりコーチにお願いしています。彼女は小学校・中学校・高校・大学・クラブと全てのカテゴリーにおいて全国出場を経験しているアスリートです。アスリートとしてのアドバイスに加え、女性の立場にたちながらも、決して甘やかさない姿勢で子ども達に接してくれるおかげで随分助けられました。非常にまじめな方なので、日頃の練習にあまりつけないことを恐縮されていますが、かえって試合のときに「上手くなったねえ〜。」と彼女から一言いわれたくて頑張る選手もいるほどです。ありがたいものです。

3. 予選を振り返って～全市・全道のポイントの置き方

札幌市の新人戦では北星の後塵を拝したものの、全道新人では優勝。10周年記念の恩恵に授かって、全国トップの若水中との試合を経験することもできました。震災で中止にはなったものの、北海道選抜には南部七虹・牧野里衣子・西尾友歩の3名が選出。札幌選抜にも蛭田亜未・竹内野乃・田中百華の3名が入り、いよいよ全中というものに照準を定めた取り組みが4月から始まりました。

北海道カップではあの名門・藤浪中に勝つという経験もでき、松山南第二には敗れましたが、子ども達にも「狙うは全国優勝！」という大きな志が立ちました。ところが、その直後の札幌春季大会の決勝で北星女子に負けました…。実はこの試合で、この代の子ども達の課題が浮き彫りになったのです。

体力強化でスタミナ面での不安は解消されたものの、いかんせん3年生は5名しかいません。選手層の薄さが何よりもウィークポイントで、積極的なディフェンスが裏目に出てファウルトラブルに陥ってしまうと大ピンチになりました。ただ、やっぱり幸いなことに清田中には即戦力の新入生が入部してきます。今年も清田緑少年団で全道優勝を果たしたメンバーが入学してくれたおかげで、一気に選手層が厚くなりました。特にビッグセンターの栗林未和と抜群のシュート力をもつ池田玲奈という2人のスーパールーキーの加入はチームを大きく活気づけました。

ただ、下級生を簡単に使えば、上級生や保護者からクレームが出るのは清田も同じです。しかし、抗議を恐れる余り、コーチが本当に大事なことを見失っては子ども達のためになりません。自分たちの目的・目標・夢がどこにあるのかを考え、なぜ下級生を使わなければならないのか。春の敗戦で腹をくくった私は子ども達に話しました。完全にわだかまりがなくなったとは思いませんが、夏に向けての一步を踏み出しました。

札幌の中体連は7月の2週に渡って4日間で行われます。ロングランの大会では、ともしれば緊張感を持続できず、心身のコンディションを崩してしまう恐れさえあります。また1日目は18会場、2日目は8会場で行われる大会規模ではジャッジする審判も含め、波乱の起こる要素があちこちにあります。慎重に慎重を期して1試合1試合にあたるしかありません。子ども達にも「先のことばかり考えて、足下が疎かにならないように」「高い目標があるからこそ一戦一戦に全力を尽くそう」と話して全試合に臨みました。

スーパールーキーの加入で選手層は厚くなりましたが、これだけで勝ち抜けるほど全市大会は甘くありません。自分達の好不調に加え、相手の勢いもあるので、思わぬ苦戦を強いられることは多々あります。そこで、どんな状況に置かれてもはねのけるための手段として、ディフェンスに変化やアクセントを加えるためのプレスとマッチアップゾーンを行うこととしました。マンツーマンだけでは勢いが乏しい時に、これらのディフェンスを行うことは効果が出ます。予選の早い段階ではありましたが、八条中や西野中といった好チームとの試合でその威力を発揮することができました。「中学生ではマンツーマン以外やるべきではない」という声は多くあります。しかし、自分たちの目的・目標・夢はどこにあるのか。そして、我々の大好きなバスケットボールはそんな凝り固まった小さなものなのか。コーチは批判を恐れるべきではなく、子ども達の矢面に立ちながら進むべきだと私は考えています。いろんな場所で話していますが、「150kmの速球で三振を獲れなくても、ピッチャーはできる」のです。

こうしてみるとわかる通り、中学校の指導者とは言っても、頂点に向かうためには4つ勝たなければいけないことがあります。1つ目は「選手」。しっかり選手を掌握し、自分の意図を理解させ、それでいてその子らしさを存分に発揮してもらおう。毎日の練習で真剣勝負すべきなのは他ならない選手とでしょう。2つ目は「保護者」。少子化の昨今、親御さんの子ども達へかける期待は並々ならぬものがあります。時にはイラッとくることがあっても子どもを思う親の愛情を理解し、つかず離れずの距離を保ちながら協力をお願いしていかなければなりません。3つ目は「学校」。頑張れば頑張るほどに、ともすれば校内において孤立しがちなものです。『出る杭は打たれる』とはよく言ったもので、そんなつもりがなくても勝って注目を浴びる分、「バスケット部は…」と周りも一言いいたいくなるものです。しかし、こちらに非はないからと言って学校内で全く浮いた存在になるわけにはいきません(部も指導者も選手も)。自分たちの目的・目標・夢を周囲にも理解してもらえるように、日頃から行動していくことが必要です。そのためにも学校生活をしっかり送ること。指導者であれば教科指導や校務をしっかり行うことが大切になります。

そして、最後に勝たなければいけない最大の難敵はやはり「自分」です。指導者は所詮孤独。下手をすると誤解されて誰からも理解してもらえないことがあります。休日を投げ打って練習に励むので、家庭からも阻害される危険性があります。「勝つにはどうしたらよいか…」と苦悩する日々に何日も付き合ううちに、孤独に負けて「もうこの辺でいいかな…」とあきらめる気持ちがついつい出てきてしまうものです。最も厄介なこの相手に立ち向かう際、今年の私は音楽に救われました。厚北は自宅から車で5分でしたが、清田までは30分かかります。車の運転嫌いな私にとっては、これも苦痛な時間なのですが、せめて好きな音楽でも聴いてリラックスできる時間に充てています。今年の夏はBEGINを聴いていました。夏にピッタリの彼らの曲ですが、その中にあまり有名ではありませんが『誓い』という曲があります。この曲の歌詞の中に、私の心の琴線を振るわす言葉がありました。これを聴いて「孤独につぶされている場合じゃない。清田で勝つことは厚北の

子ども達と約束したことだ！」と思い返し、気持ちを奮い立たすことができたのです。あの曲と出会わなかったら、もしかしたら私の指導に狂いや迷いが生じていたかもしれません。音楽の効用を再認識しつつ、たまたま聴いたB E G I Nに感謝しています。

さて、話を予選に戻します。全市を勝ち抜き、全道へ…という期間が札幌は長くはありません。下手をすると全市の激戦でへトへトになったまま、全道に向かう。それでいて「札幌で勝ったのだから、もう大丈夫」という油断が選手には生まれたりします。

そこで、全市から全道へとステージが変わる際に、私が気をつけていることは身体と心のコンディショニングの調整です。中学生だからピークをいつまでも持続することはできない。指導者の側で意識的に落とし、また上げる作業。これを行います。心の面で言えば、子ども達は組合せが決まれば対戦相手に一喜一憂し、勝手にテンションを上げ下げしますが、この手綱をいかにさばくかも大事なことです。

そして、もう1つ忘れてはいけないのは下級生の存在です。全道大会に出られるたった2校以外の他チームは、すでに新チームがスタートしています。最近の子ども達はメールでのやり取りを他校の子ども達ともさかんにしますから、先輩方が勝つことは嬉しいけれど、自分たちの代のスタートが遅れることには焦りを覚えたりします。ともすると、これがチーム全体のモチベーションには良い影響を与えません。チームが1つになるためには、1人残らず、目標に向かって突き進む雰囲気を作り出していくべきです。そのために、新チームのスタートを全中への取り組みと平行して、私は行っていきます。具体的には、練習の中で3年生 Vs.新チームのゲームを行ったり、二部練習にして3年生はコンディショニング重視で午前中の早めの練習で終了。でも下級生は午後からも練習…といった感じです。「今年さえ良ければいい」のでなければ、このような取り組みを行うことが大事と考えます。苦勞するのは指導者ですが、それぐらい苦勞して初めて「先生、大変ですね。」の言葉が周囲から聞かれるものです。

なお、全道大会の前から学校は夏休みに入ります。長期休業期間中の利点には体育館練習が毎日できることにあります(清田の放課後練習は通常水曜と金曜しか体育館が使えません)。集中的に練習することができますが、部活動は他にもあります。自分たちだけが特権をもって好き勝手にやるというわけにはいかないでしょう。それでも、全道に向かって練習する意義を周囲に理解して頂き、練習時間を固定してもらいます。考え方はいろいろあるでしょうが、私は午後の時間を設定しました。そして、練習を中心に置いた生活のリズムを子ども達に作らせます。その上で、「5日後のこの時間。お前達は全道の決勝戦の舞台で試合をしているはずだ！」とか、「今頃はもう結果が出て、泣いているか笑っているかだぞ！」などと、子ども達の心を揺さぶる言葉を投げかけます。ただし、散々そんな言葉を言ったあげくに、山の手の上島さんの言葉を借りて「勝つことは大事だが、それ以上に自分たちの試合をすること。それが最も大事。」と言いつけて聞かせています。

このような取り組みを行って全道大会を迎えました。今年はこの取り組みの間に、津梅直哉コーチがスタッフに加わり、指導がグッと楽になりました。彼とは同年齢で旧知の仲

なので、私の愚痴の聞き役になってもらったり、時には私の盾となって批判に真っ向から立ち向かってくれることもありました。本当に心強い仲間をスタッフに迎えることができたのは最大の幸運でした。感謝としか言いようがありません。

幸運にも恵まれながら、戦略的な取り組みを十分に行って臨んだ全道大会は2回戦からのスタート。初戦から新進気鋭の島勇治先生が率いる釧路青陵との対戦。次いで3回戦は若手有望株である北村剛先生の大塚。どちらもそう簡単には勝たせてくれない相手でしたが、返って気の緩むことなく大会に臨むことができたのは好材料でした。日頃から言い続けている「一戦一戦に全力を尽くす」という言葉通りに試合を進めることができました。

そして、北海道ブロックからは2チームが全中へとコマを進めることができますので、決勝戦以上に準決勝が大きな意味を持ちます。相手は函館地区でめきめきと頭角を現している滝花晋先生が率いる深堀。印象的には突出したスーパースターのような選手はいないものの、スタメン5人全員の体格・力がまとまっており、自分たちの勝つスタイルをよくわかっている感じでした。実際に試合をしている上で、リードはするものの10点差前後から中々突き放せない展開に。そうこうするうちに、こちらが一番恐れていたファウルトラブルが発生。ベンチからスーパールーキーを投入しても、この大一番ではやはり力を発揮することができず、遂に1点差を争うシーソーゲームにもつれ込みました。

しかし、このような状況が起こることも想定して、何度も子ども達に話していたことがあります。それは、あの釧路での厚北 Vs. 江別二戦のことでした。会場中が「厚北が負けるのか」といった何とも言えない雰囲気になり込んでいく…。そんな重圧に押しつぶされそうになっても、最後に信じられるのは仲間なんだということを話していました。

また、具体的な取り組みとして、5分で10点ビハインドをはねのける練習を、男子相手に夏休み中毎日行っていました。そんなこともあってか、主将の南部七虹は「練習で何回もやってきたのと同じような状況だったし、先生にずっと言われてきたことだから、『やばい…』とか『負けるかも…』なんて少しも思いませんでした。」と試合後にケロッと言っていました。全く以て、子ども達はたくましいものです。ただ、私にとって何よりも幸福だったのは、この状況でベンチにいて直接指揮を執ることができたことです。子ども達の目を見て、直接語りかけ、チームの勝利を信じてともに全力を尽くす。指導者にとってこれほど素晴らしい時間はありません。釧路ではそれができなかった私にとって、最大のピンチではありながら、最も幸せを感じていた時間でした。

ちなみに、この時の終盤に私が執った策は何と無策です。残りの時間と点差を考えた場合はストーリングやナンバープレイなどを考え、選手にあれこれ細かい指示を送るのが定石でしょうが、私は試合の流れと子ども達の勢いだけを重視して、特に策を施しませんでした。深堀のプレスに対して苦しんでいるにも関わらず、下手に考えてボールコントロールしようとする、積極性を失って逆に引っ掛けられてしまう可能性が高いと見たわけです。それならば、清田の最大の武器はシュート。終盤になってやっと当たりも戻ってきましたし、リバウンドも頑張れるようになった。であれば、思いきりよく行くしかない…と

判断したわけです。この試合を観戦された人の多くが、試合終了直前の3ポイント攻勢を酷評されていたようですが、私はそう思っていない。全道大会終了後に、深堀の滝花先生と話す機会があり、その場で「あそこで3ポイントを打たれ続けたのが誤算でした…」という言葉聞くことができました。理論ではなく、実際に試合した相手にしかわからない勝負のやり取りの中で、自分の取った策が間違いではなかったと確信しました。

もちろん、シュートが外れば負けたかもしれません。でも、その時は指導者が責任を取ればよいのです。ただ、もっと言うと、あの場面のあの流れと勢いで、うちの選手がシュートを落とすとは思っていません。試合は残り1分を切って、1年生の池田玲奈が放った3ポイントが最後に決まって4点差。彼女のお父さん(池田吉利先生・平岸高校教諭)でさえ、ストーリングを信じていたにも関わらず、自分の娘がシュートを打ったことに驚愕したようです。

その折返しの深堀の攻撃で、かなり遠く離れた所から3ポイントを決められ、1点差まで詰め寄られました。残り時間はほんの数秒。素早くスローインして、ボールをキープしタイムアップ。子ども達にとっても1つの壁を破り、夢舞台である全中への切符を手に入れた瞬間でした。この時、ベンチにいた私は小柳大を始めとする厚北の子ども達の顔がふっと思い浮かびました。そして、試合終了後にコートを離れた際、応援に駆けつけてくれていた彼らを見た瞬間、約束を守られたことに安心して、ちょっとだけ涙が出そうになりました。

決勝戦は名将・金森直人先生の率いる大麻東でしたが、全中出場が決まってそれだけではなく、優勝することに意味があると考えた子ども達の意識のおかげで勝てました。もちろん、北海道ブロック2位で行くよりは1位で行った方が組合せ的にも有利なのは言うまでもありませんが。そんなことよりも、私の心配事はTV中継に適した言葉遣いや表情でベンチワークができるかということ。そういう意味では、選手よりも私が一番いつもと違ったよそ行きの雰囲気を出していたかもしれません。まだまだ修行が足りないことを再認識しました。

4. 全中出場権を獲得した後で～成果と課題

実は全中は、出場を決めてからの方が大変なことが多いです。いよいよ夢舞台に臨む選手達の心技体の最終調整は言うまでもなく、交通手段・宿泊施設の手配、それに伴う経費の試算、協賛金活動の工面、現地での練習会場の確保といったマネジメントから、対戦相手のスカウティングに至るまで、一日が24時間では足りない状況になります。

ここで、指導者・選手・保護者が一丸にならなければいけないのですが、お互いの利害がうまくかみ合わないと、もめるだけの構造になってしまい、「こんな思いをするぐらいなら、全中になんて行かなければ良かった。」となってしまうわけです。

清田は過去に何度も全中に出場していますが、補助金の対象となるエントリーメンバーだけでしか全中に行ったことがなかったようです。つまり、エントリーに入れなかった選

手は必然的に居残り。これまで共に努力し、喜びを分かち合ってきた仲間の中に、まるで天国と地獄のような差が生まれるわけです。もちろん、これがチーム運営にとって良いわけがありません。しかも、今年度に関して言えば、1年生が上級生に取って代わってユニホームを着ているわけですから、単純に「ユニホームを着なかった者は居残り」と言える状況にはありませんでした。

ただ、そうは言っても遠征にはお金がかかります。前述したように補助金で全額負担をしていた時もありましたから、エントリー以外の選手を連れていくことには相当の反響が予想されました。それでも、何とか指導者の意を汲んで頂いて、全部員を全中の舞台である滋賀に連れて行くことができたことには、今でも本当に感謝しています。

もちろん、少しでも金銭負担を減らすために、短期間ではありましたが、協賛金活動も実施しました。「急をお願いしたって集まらないよ…」と揶揄もされましたが、そんな予想に反して、多くの方々のご厚意が集まりました。このノウハウがチームに残ったことが大きな成果だと言えます。今後の出場の際は今回のマニュアルやデータベースが生かされることでしょう。

しかし、その一方でスカウティングについては、同じ予選リーグのチームについて情報収集するのが精一杯で、それ以上のことはほとんどできませんでした。予選を突破した後の決勝トーナメントのことを考えると、それでは全く心許ない…。特に今回初めて女子での全中出場でしたが、男子以上に個性あふれるチームが全国各地にあります。正直言って、男子なら「うん、何とかなるかな。」と思える組合せが、女子となると1試合たりとも気を抜かず、強豪チームばかりという印象です。だからこそ、変に名前だけで強いというイメージを先行させずに、冷静にスカウティングしていく必要があります。それができなかったことが全中に向けての取り組みで最大の反省点です。実際、決勝トーナメント1回戦で当たった飯山に関しては付け焼刃の知識しか手に入れることができませんでした。子ども達には大変申し訳なかったと思っています。

日本は広いですが、全中に出場するチームは、北海道を除く8ブロックからわずか22チームしか出ません。これぐらいのスカウティングなら何とかなるでしょう。1人の力では限界がありますが、指導者の仲の良い北海道の特性を生かし、全国の担当ブロックを決めて道外遠征に向かう手もあるな…と考えたりもしました。上手くやれば全国の情報を完璧に手に入れることは可能だと思います(これは全くの夢物語ですが)。

最近では全中の試合会場ともなると、寒いぐらいに冷房が入っており、北海道の夏場の体育館の方がよっぽど暑く感じます。そう考えると、昔のような暑さ対策はしなくてよいわけで、その分スカウティングに力を入れていくべきです。今後はスタッフで役割分担をしっかりと行い、スカウティングを強化していくことを大前提に考えていきます。

なお、練習に関してはかなりガッチリやりました。1時半から7時までの練習を連日続け、お盆休みもほとんど返上したほどです。名著『チームを創る』の中で、山崎純男先生はインターハイ前に追い込んだ練習をしなかったようですが、私は最後の最後まで子ども

達の伸びに期待して猛練習しました。たった1年間しか指導できなかった分を穴埋めしたいという思いが強かったからです。「これだけやったのだから」という達成感をもたせ、出発前日から軽めの練習に切り替え、選手の疲労を取り除き、ベストの状態で滋賀に向かいました。

5. 全中を終えて～終わりは始まり

全中予選リーグの初戦は大阪薫英女子との対戦。時を同じくして行われていたインターハイでは、山の手高校が薫英の高等部に敗れていました。中等部はここ数年強化に乗り出した新興勢力であることはわかっていましたが、そうは言っても「薫英＝強敵」という印象が脳の中に定着する感は否めませんでした。最もそれは大人の方で、子ども達にはさほどのプレッシャーはなかったようです。むしろ「山の手の手を返そう」ぐらいの気持ちでいました。

試合は相手が1・2年生主体の分だけ、体格やパワーでこちらが上回り、優位な展開に持ち込むことができました。しかし、そこはやはり全中。簡単に勝たせてくれるわけがありません。20点差ぐらいあっという間に引っ繰り返されるのを、私は何度も見てきます。選手にもそのことを十分に伝えていましたが、西尾友歩がファウルトラブルに陥ったのをきっかけに、猛攻にあいました。

ターニングポイントは第3ピリオドの終わり際。10点リードの場面で薫英ボール。ここでシュートを決められて一桁の点差まで縮められれば、最後は勢いに飲まれたかもしれません。速いパス回しから相手のガードに3ポイントを狙われた瞬間は「あっ、ヤバイ！」とベンチで思わず息をのみましたが、蛭田亜未が抜群の運動能力を生かしてブロックショットに成功。しかも、その折返しのオフenseでジャンプシュートを決めてくれて、チームに落ち着きをもたらしました。第4ピリオドの残り5分からは西尾をコートに戻し、全道準決勝とは違って、しっかりと時間を使って逃げ切りに成功。清田中としては実に29年ぶりの全国での勝利を飾ることができました。

予選リーグのもう1試合は八王子第一との対戦です。全中優勝経験もあるチームとの対戦は光栄の一言。関東ブロックのバリバリの優勝候補でしたが、延長戦で駒澤女子に敗れ、関東2位での出場、ウチと同じブロックになったわけです。薫英がその前の試合で八王子に敗れたので、決勝トーナメント進出は確定した段階での最終試合となりました。もちろん、この試合に勝てば決勝トーナメントは予選2位のチームとの対戦になり、負ければ予選1位のチームとの対戦。勝てば断然有利なのは言うまでもなく、この試合に勝負をかけました。

八王子には米長というスーパーガードがいましたが、ハーフコートマンツーマンで十分に守りきれると判断。西尾をマッチアップさせて試合に臨みましたが、立ち上がりには米長に連続ゴールを許し、3-15と苦しい試合展開になってしまいました。胸を借りるのが目的ではなく、あくまでも勝つことが目標。マンツーマンへのこだわりはあっさりとして、

2-2-1のゾーンプレスから1-2-2のマッチアップゾーンへとディフェンスを変えました。さらに、米長へのパスを遮断し、徹底マークを強調。ポイントを絞った守りで相手を揺さぶりました。これが功を奏して、第2ピリオドから反撃を開始。1年生ながら抜群の得点感覚をもつ池田の活躍もあって、ほぼ互角の展開で前半を終えました。

後半に入っても一進一退の攻防。八王子の桐山先生が明らかに冷静さを欠いて、逆上していることが反対のベンチから見ても手に取るようにわかりましたので、チャンス到来と考えたのですが…。良いところまでいっても思うようにシュートが決まらず、結局41-49と8点差で敗戦。勝てる試合を落としたと思っています。

敗因は八王子のプレスへの対応。長身の栗林をポストアップさせ、パスをつながせましたが、むしろ南部をポストアップさせてドライブから攻撃を展開させた方がチームに躍動感をもたらせたと考えています。決して栗林で失敗したわけではありませんでしたが、勢いが生まれず、重たい試合運びになってしまった分、決まるシュートも決まらなくなったと考えます。

もちろん、大事な試合で決められなかったシュートにも不満は残ります。こういう試合を想定して、日頃からシュート練習に取り組まねばダメなわけで、フリースローの成功率も含めて残念な結果でした。

しかし、裏を返せば、これらがきっちりできれば全国上位進出は夢ではないということ。相手が高をくくっていたことは差し引いても、全国との差はそれほどでもないと感じた一戦でした、むしろ、頂上が見えてからの一步は、緩やかな麓で進む一步よりもはるかに厳しいのは言うまでもありませんが。

試合が負けたのはもちろん残念でしたが、「全国でもやれる」という手ごたえと同時に、最大の収穫を得ることもできました。それを実感したのは、八王子一戦終了後に我々が休んでいるところまで、大会関係者の方がわざわざ足を運んでスコアを届けてくれた時のことです。「素晴らしい試合に感動しました！」と興奮気味に声をかけてくれたその先生に、子ども達は「ありがとうございます。」とお礼を言いながらも「こんなんじゃ、まだまだです。」とはっきり言いました。全中優勝校相手に一步も引けを取らぬ試合をしても、それに満足することなく、さらなる高みを目指そうとする彼女達の向上心と謙虚な心が見えました。ある意味、私はこの代の活動にこれで満足したところがあります。たった一年の活動で彼女達の人的成長を感じることができたからです。

夜になり、決勝トーナメントの抽選会。「若水、強し！」の評判が飛び交う中、くじを引いた時は「どことやってもいい」とは思いながらも、若水中のトーナメントでの位置を確認したものです。

抽選結果は四国1位の飯山中との対戦となりました。情報は全くなかったのですが、北海道カップで来道した松山南第二の松本先生からチームの特徴などを教えてもらいました。決して上背は高くありませんが、当たりの強いプレスとシュート力のあるチームとのこと。後でデータを見ると前年度の広島全中でもベスト8に入っている強豪でした。「四国=弱

い」なんて思うのはとんでもない誤りと言えるでしょう。

予選リーグでも1試合40点を取るスコアラーの④安藤を中心に、どこからでも点数取ってくるチームスタイル。プレスも確かに強烈でした。…が、勝てるチャンスは十分にあったと思います。特にスタメン5人のうち、1人だけシュートをあまり打ってこない選手がいたことにもっと早く気づくべきでした。また最後の最後にこちらが当たりを強めた際、相手のボール運びを崩すことができたことから考えても、やりようはいくらでもあったと考えます。

結果は10点差の敗北。負けた瞬間に思えたことは、やはり積み上げてきたものの少なさでした。入学してから全中での活躍を夢見て作り上げたチームと、たった一年弱の突貫工事で全中に出場したチームとの何ともしがたい差を感じました。こればかりはどうしようもありませんでしたが、それでもここまで頑張ってきた選手のことを考えると申し訳ない気持ちでいっぱいになりました。選手はよくやりました。「勝ったのは選手のおかげ。負けたのはコーチの責任。」改めて認識した次第です。

彼女達との日本一への挑戦は終わりました。しかし、新チームの取り組みは始まります。終わりは始まり。新チームでの挑戦が今年以上の結果を残すことができたとしたら、それは間違いなく今年の土台があったからです。だからこそ、私は新しいチームでも頑張ります。それは厚北の子ども達ともつながっているからです。

多くのご縁に恵まれ、全中出場という機会を得られたことに感謝しつつ、また新たな挑戦を目の前の子ども達と続けていきます。それがすべては子ども達のためになると信じて。今後とも清田中学校の活動に変わらぬご指導・ご鞭撻をよろしくお願いします。